

研究課題別事後評価結果

1. 研究課題名： ソーシャル・イメージング：創造的活動促進と社会性形成支援
2. 研究代表者名及び主たる研究参加者名（研究機関名・職名は研究参加期間終了時点）

研究代表者

鈴木 健嗣（筑波大学システム情報系 教授）

主たる共同研究者

山本 淳一（慶應義塾大学文学部 教授）

3. 事後評価結果

○評点：

A+ 非常に優れている

○総合評価コメント：

自閉スペクトラム症児（自閉症児）の早期発達支援という社会的インパクトの高い課題に挑戦し、自閉症児の行動計測と介入による行動変容を実現できるシステムを開発し、実際の筑波大学附属大塚特別支援学校、米国フィラデルフィア小児病院などで有効性を実証した。早期発達支援・介入とヒューマンインタフェース技術分野の共同研究チームにより、自閉症児が受け容れる装着型機器と画像計測法および介入支援法を開発した。特に、特別支援学校の体育館において「ミライの体育館」とよぶ大規模床面プロジェクタ・カメラシステムを構築し、発達障害児・者同士の相互コミュニケーションや連携する社会行動を支援、見える化する「ソーシャルイメージング技術」を開発した。研究成果は、ヒューマンインタフェース技術と発達支援、それぞれの分野で著名なIEEE Affective Computing論文誌およびDevelopmental Cognitive Neuroscience誌や国際会議CHI等、合計71件発表され、最終目標を達成した。これらの成果は戦略目標である「状況に応じた対話」と「対話・作業メカニズムの解明」の達成にも貢献した。今後、事業化により、ミライの体育館、遠隔発達支援、自閉症児の行動計測装置、自閉症児の身体性を疑似体験できる他者理解装置などの実用化が段階的に進み発展していくことを期待する。